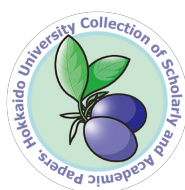




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学百二十五年史掲載論文「札幌遠友夜学校の終焉」に反論す
Author(s)	藤田, 正一
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 22, 21-31
Issue Date	2015-03
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.22.21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61087
Type	departmental bulletin paper
File Information	No2203.pdf



Reevaluation of the article on “Last Days of Sapporo En-yu Night School”
that appeared in the collection of articles in “125 Years of Hokkaido University History”

Shoichi Fujita*

School of Veterinary Medicine, Hokkaido University

北海道大学百二十五年史掲載論文
「札幌遠友夜学校の終焉」に反論す

藤田 正一**

北海道大学大学院獣医学研究科

Abstract — Atsushi Mikami published an article on the fate of the En-yu Night School during World War II entitled, “Last Days of En-yu Night School, the charitable educational project practiced by students and faculty members of Hokkaido University under nationwide wartime involvement.” The En-yu Night School was established by Inazo Nitobe and his wife Mary. They donated money to establish this school, and accepted pupils without tuition who would otherwise not have had a chance to receive education due to poverty. Nitobe’s students voluntarily taught at the school. This school lasted for 50 years with the help of more than 500 voluntary student teachers.

Nitobe is well-known as the author of the book “Bushido, The Soul of Japan” and for his world-wide activities, including his being an under-secretary general of the League of Nations. Being a Quaker, he was a peace advocate. It is widely accepted that the En-yu night School was forced to discontinue as an educational institution because it did not accept the practice of military drills, being obedient to the spirit of the founder of the school in spite of orders from the military. In his article, however, Mikami claimed that this was not true. He searched various documents, including the School Diary written by the volunteer teachers, and concluded that they rather willingly cooperated with the national policy and closed the school. Mikami did not discuss whether or not the Japanese military demanded the practice of military drills at the school.

In this article, I report new evidence that shows the military did indeed order the practice of military drills, but that the school did not obey that order. This strongly supports the currently accepted story about the unfortunate fate of the En-yu Night School.

(Accepted on 20 January, 2015)

*) Correspondence: School of Veterinary Medicine, Hokkaido University, West 9 North 18, North Ward, Sapporo, Japan
E-mail: kt3s-fjt@asahi-net.or.jp

**) 連絡先: 060-0818 札幌市北区北 18 条西 9 丁目 北海道大学獣医学部

目的

『北海道大学百二十五年史，論文・資料編』202–240 ページに掲載された三上敦史著の「札幌遠友夜学校の終焉—北海道帝国大学関係者による社会事業と総力戦体制—」(三上 2003) の中で，三上は新渡戸稲造が設立し，北大生が無償で教師役を務めた，貧しい子供たちのための無料の学校・札幌遠友夜学校の終焉を検討し，それが廃校になった理由として，従来言われていた，「軍事教練を課さなかったために軍から睨まれ廃校とされた」とする説は誤りで，創作である。実情は，当時の状況により，生徒の著しい減少と，北大生の勤労動員により教師が確保できなくなって物理的に継続困難になったことのほかに，「国策に協力するために廃校とした」のであるとしている。

しかし，三上が参照していない，同校の廃校に立ち会った最後の学生教師・松井愈（まついまさる）の残した冊子：「遠友夜学校に学んで五十年(稿本)」48 ページに「昭和 17 年 遠友夜学校に軍事教練を課せと要求」があったことが記載されている（松井 1991）。この要求にもかかわらず，昭和 19 年 3 月，北海道庁内政部より廃校にせよと言う指示が下るまで，遠友夜学校は生徒に軍事教練を課していない。太平洋戦争期の翼賛体制下で，国の方針に対するこのような非協力的態度は決して許されるものでは無かったであろう。松井はこの学校が廃校に至る経緯を自身，及び，同じく遠友夜学校の学生教師を務めた須田政美の手記，そして，当時の庶務日誌を引用して解説している。この松井の冊子に書かれた情報は三上論文では検討されていないが，三上の結論の重要な部分とは相容れないものであると考えられる。さらに，三上が参照した庶務日誌を見ても，「国策に協力するために廃校にした」というような自発的協力を示唆する記録はなかった。北大の正史に掲載された論文であり，現代の人々だけでなく後世まで誤解が残る可能性があるため，ここに再考の必要性を考え，報告書とした。

序論

遠友夜学校とは，1894 年に新渡戸稲造夫妻が，稲造の妻メアリーの実家エルキントン家に生涯仕えた孤児で，メアリーの乳母であった女性の遺言によりメアリーに贈与された彼女の遺産を，『そのような事情の人からの尊い金であるから』として，貧困故に学校に行けない子供たちのために設立した無料の学校である。この学校の教師は，札幌農学校／北海道帝国大学の学生たちが無償で務めた。有島武郎，木原均，鈴木限三，館脇操，半沢洵，高倉新一郎，石塚喜明ら歴代の有名北大教授も若き頃，この学校の学生教師として恵まれない子供たちのために教鞭をとっている。

『札幌農学校，クラークとその弟子達』(1981) を著した蝦名賢造は遠友夜学校の意義について次のように述べている。

「新渡戸稲造夫妻の札幌に残したもつとも美しい，高貴な遺産の一粒は，このささやかな札幌遠友夜学校であった。それは新渡戸をふくむ札幌農学校全体の教育精神そのものの体現ともいえるべきものであり，また逆に農学校全体にヒューマンイズムの精神を注入することにもなった。もし札幌にこの遠友夜学校の一施設がなかったならば，当時無学のままに一生を終わってしまったであろう数千の人材を育成する機会は無永遠にあたえられなかったであろう。またこの夜学校あることによって，この学校の教師として学生時代の重要な時間を数百人の札幌農学校生徒，そして北海道帝国大学学生が取り組み，人生と社会にたいする知識・経験をあたえられ，有用な人材として世に送り出されていった。これらの教師と子供たちを包容して，実に半世紀にわたって一貫して脈々と流れるヒューマンイズムの精神は，いかにこの地域の教育の深層に注入されたことであろうか」（蛭名 1980）。

この学校は 1944 年 3 月まで 50 年間存続し，廃校となった。

三上は，この学校に関するいくつかの書物を引用しつつ，その中に「非歴史的記述」があると指摘する。しかし，その論旨には科学的思考からの逸脱と調査不足が散見され，それらから誤った帰結が導かれていると考えられるので，筆者の得た新たな知見

と併せて考察する。

少し長いが正確を期するために三上論文の問題提起部分を以下に引用する。

「こうした研究に登場する遠友夜学校は、たった一つの定型によって語られている。全くの善意から大金を抛出した新渡戸、それに共鳴して無報酬で教授の任に当たった北大生、働きながら学ぶ苛酷な生活に耐えながら通い続けた生徒たち。この三者が愛情や信頼感で一体となって形作った理想の学校、戦時体制の深化による廃校、そうした哀しくも美しいストーリーである。

無論、遠友夜学校の歴史から受ける印象がその定型から外れることはありえまい。新渡戸は国の内外を問わない活躍のなかでも夜学校に心を配り続けたのであるし、農学校生／農科大学生／北大生は50年もの長きに亘って無償教授のバトンを繋いだ。生徒の回想も例外なく感謝が綴られる。しかし、その印象で遠友夜学校の歴史それ自体を語ろうとすれば、新渡戸・北大生・生徒を礼賛するあまり、真実を見失う危険なしとしない。中でも廃校の経緯については非歴史的な記述が目立つ。上述した先行研究のなかにも、例えば次のような謬見が散見される。

『新渡戸先生のこのヒューマンにあふれた精神、これを貫こうと遠友夜学校の先生方は、戦時、遠友夜学校の生徒に軍事教練を課しませんでした。「軍事教練を課さない学校、これは存在に値する学校ではない」として軍の怒りを買うことになるのであります。そして、1944年3月、遂に遠友夜学校は閉鎖に追い込まれるのであります』(山本 1995)。

俗耳に入りやすいストーリーであるが、当時の同校の庶務日誌や関係者の手記・回想を読む限り、新渡戸の精神と軍事教練とを絡めて考えていたような事実はいくつか見えない。また、教練を課さずに経営を維持していた学校は全国にいくらかもある。新渡戸の精神を貫くために軍事教練を課さなかった、それがため軍の怒りを買って閉鎖に追い込まれたという説明は単なる思い込みによるものか、現代風の意味づけを与

えるべく付加した創作だと思われる。

このような謬見で歴史を語っているうちは史実が見えることはなく、当時を生きた関係者の思いに触れることもできない。例えば、遠友夜学校が最後の卒業式・終業式を行った1943(昭和18)(著者註:1944(昭和19)のあやまり)年3月6日の同校の庶務日誌¹⁾には以下のような記述がなされている。

『自分は今、「夜学校五十年の流れを、ここに喰ひ止めた物は何か」と考へて居る。夜学校の精神は、50年の長きに亘って、些かも変形されずに今日に迄至って居る。然し、理想は、変らないとは云へ、周りを囲む現実、年々歳々変わって行つた。今となつては、この様な夜学校の存在する事すら奇異な程、世の中は変わったのである。

現実を考へる時、今こそ夜学校が最後の幕を閉すべきであるとより思へない』。

庶務日誌を記述するのは、庶務を担当する幹事教師(たる北大生)である。教師として数年の経験を積んだなかで人望ある者が選ばれ、授業以外に事務作業をも献身的にこなす。無論、学生らしく高い知的水準と批判力も有しているだろう。そうした者が、公開を前提としない内々の日誌につづった「現実」とは具体的にどのようなものだったのであろうか。当時の教師たちは何を思いながら教育に取り組み、また閉鎖を決断したのであろうか。そうしたことを考えることなしに、遠友夜学校の最期について正しく把握することは難しい。本研究はそうした問題関心に立って、遠友夜学校が閉鎖を選ぶに至った過程を明らかにすることを目的とする(三上 2003)。

ということから説き起こし、三上は以下の結論に達したとしている：

「つまり、遠友夜学校の廃校は軍部ににらまれた結果ではない。(1)青年学校義務制・中学校夜間部の発足、さらには戦時体制の深化によって多数の生徒を集めることは難しくなっていたことにくわえ、(2)四カ月の継続動員が決定したことによって教師たる北大生が時間を確保できなくなったことによって授業の継続を

断念し、(3)倉庫として校舎を供出するという
国策に協力するために廃校としたのである」
(三上 2003)。

本論文を読んで、多くの点で非常な違和感を覚えた。その中には、三上が「謬見である」「非歴史的記述」と批判した書物がいずれも遠友夜学校関係者が書いたか、関係者が存命で、証言を得ることが出来た時代に書かれたものであるということも含まれる。また、記録が見つからないからそれらの事実はなかったとする考え方に対しては、調査不十分で、まだ記録はあるかもしれない、と言う疑問が生じた。彼の結論の(1)および(2)については遠友夜学校の庶務日誌からも読み取れることであり、札幌市教育委員会発行の「さっぽろ文庫 18『遠友夜学校』」(1981)、北海道新聞発行の『思い出の遠友夜学校』(1995)の中でも同様の指摘がなされていることなので異論は無い。しかし、(3)の「『国策に協力するために』廃校にした」という文脈はどこにも読み取れない。むしろ、必死で生き残り策を検討したが、休校とするより他に道は無いと判断したことが見て取れる。しかも、遠友夜学校庶務日誌¹⁾によれば、当時の遠友夜学校関係者たちが廃校を決定してもいないのに、昭和19年2月25日に夕張のある工場から電話があり、「夜学校は廃校になって軍の兵舎になるとのこと、軍から聞いたが」と言う問い合わせがあったり、3月8日には、北海道庁内政部から「3月15日まで、校舎を他に貸したり、休校にすることを申し出ても認めぬ。追って指示ありたる場合、廃校の手続きをなせ」との示達があったこと、そして、3月13日には、「校舎転用協議会の結果、夜学校校舎は通信院に割り当てた」とする通知が来たことが記されている。ここに至るまで、遠友夜学校関係者による廃校の決定はない。「国策に協力するために廃校にした」と言う自発性は全く伺えない。これらの問題点に付いて以下に論ずる。

本論

まず、限られた史料の調査のみで、「証拠が見つからなかったから、そうした事実はなかった」と帰結する思考は間違いである。証拠は、あったことを

証明するものではあるが、それが見つからないからと言って事実がなかったということにはならない。世の中には、証拠が見つからないが、実際に起きた事件はいくらでもある。「自分の調べた範囲では、そうした事実を証明する証拠は認められなかった」と帰結するのが事実に正確な記述である。そうであれば、新たに証拠が見つかった時でもその記述は間違いではない。「そうした事実はなかった」と限られた調査から前提条件なしに普遍化した帰結を導いてしまうと、事実を証明する新たな証拠の発見により、その記述は覆されてしまう。

「俗耳に入りやすいストーリーであるが、当時の同校の庶務日誌や関係者の手記・回想を読む限り、新渡戸の精神と軍事教練とを絡めて考えていたような事実はうかがえない」(三上 2001)。「...を読む限り」と本人が指摘しているように、限られた史料に当たり、そのような事実が記載されていないから、「その範囲では、そのような事実がうかがえなかった」とするのは正しい。しかし、その記述の後半部分だけを、すなわち、「調べた範囲では」という前提条件なしに普遍化することは科学的思考とは言えない。しかるに、本論文を読み進むうちに、その前提条件は消え失せ、後半部分だけが真実として一人歩きしている。

三上はまた「このような謬見で歴史を語っているうちは史実が見えることはなく、当時を生きた関係者の思いに触れることもできない」と指摘するが、限られた史料を調べただけで「そうした事実はなかった」と決めつける姿勢もまた、史実を見ることを避けている姿勢ではないかと問われて反論出来るか。

三上の主張とは裏腹に、当時の同校の庶務日誌や関係者の手記・回想を読むと新渡戸の精神と軍事教練とを絡めて考えていたことをうかがわせるような記事がいくつかある。ここで、三上は引用していないが、三上論文にとって、最も重要と思われる、遠友夜学校の最後をみとった当時の学生教師・松井愈の資料を検討したい。

北海道立図書館に松井の残した膨大な資料が保管されており、その中に、遠友夜学校関連の資料も含まれている²⁾。特に彼の編纂した冊子、「遠友夜学校に学んで五〇年(稿本)」48ページには、昭和

17年に、「遠友夜学校に軍事教練を課すようにとの要求」と明記されている(松井 1991)。松井は、「暗い谷間で」と題した松井の小文に、内村鑑三が北大創基 50 周年に、北大の墮落ぶりを嘆いて小樽新聞に寄せた文章(内村 1926)、「正義に燃え、真理を熱愛し、社会人類のために犠牲足らんとする人物は一人も出しません」を引用し、その文末に、昭和 7 年に北大生 67 名が検挙された北大学生全協支持事件や、昭和 16 年のレーン宮澤事件など、当時、次第に強まる一連の、大学や学生の自由と自治に対する当局の弾圧と、それに抗して起きた事件を列挙している。その最後の一行に書かれているのが遠友夜学校に対する軍事教練の要求である。松井は自由のために、社会のために、身を呈して抗った人々が北大にはまだいたのだということを主張したかったようだ。これは、手記に見られる閉校当時の彼の心境の回想とも矛盾しない。そして、「行政は教育機関に決して干渉してはいけない」とするのは新渡戸の信条でもあった(Nitobe 1893)。東大の新渡戸門下から南原繁や矢内原忠雄など、国の戦争政策を果敢に批判し、戦後は相次いで東大総長となり、大学の自治を必死で守った人々が出ているのもその影響である(藤田 2013)。そのような新渡戸の影響が、新渡戸に直接つながる遠友夜学校で教師役を引き受けていた北大生には及ばなかったと言えようか。生

徒に軍事教練を課せという要求があったにもかかわらず、廃校になるまでの 2 年間、遠友夜学校は軍事教練を課していない。要求を無視した格好である。当時の情勢を考えるならば、このこと一つをとっても、非協力的である、あるいは、反抗的であるとして軍に睨まれるには十分である。このことが「文部省の教育方針にのっとらない学校だということで授業停止を命ぜられ、建物は通信局の倉庫に、強制貸附させられてしまい、それを機に廃校になってしまった」(高倉 1981)に通ずるのであろう。当時の翼賛体制下では文部省の意向イコール軍の意向といっても言い過ぎではなかった。

さて、昭和 17 年に軍事教練を課せという要求があったが、遠友夜学校はこれに従っていない。当時の北大生は唯々諾々と国の方針に従うような「やわ」ではなかった。1936(昭和 11)年頃から遠友夜学校の教師を務めた宍戸昌夫氏が当時の学生生活を回顧した文章に以下のようなものがある。昭和 11 年と言えば、2.26 事件のあった年である。国家統制がいよいよ厳しくなって来た時代である。

「学問の自由すらも憲法で許されることのなかった時代は現在の学生諸君には理解を超えることであろう。その中で、自由と自治を高く掲げて寮生活を人間錬成と人格陶冶の場として自らを戒めつつ、団結して当局の弾圧に抵抗

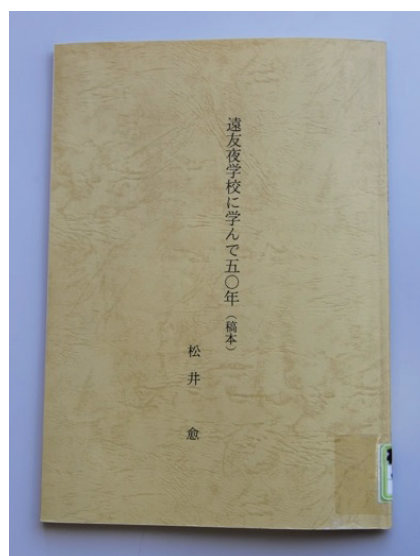


図 1. 松井愈編「遠友夜学校に学んで五〇年(稿本)」(北海道立図書館蔵)

して来た頃を回顧すると、今なお胸の騒ぐ思いがする」(宍戸 1987)。

このような意識が彼らをして、軍事教練を課せと言う要求を無視せしめたのではなかろうか。

また、戦後、北大理学部教授となった松井愈の教え子で、現東京大学教授の木村学氏のブログに遠友夜学校に関する次のような記述がある。

「このクラークから新渡戸稲造へそして遠友夜学校へつながる系譜は戦前の日本にあって、リベラルな教育の重要な流れであった。

後に、第二次戦争最末期に本郷キャンパスの大本営接収に敢然と抵抗し、戦後 GHQ 本部のための本郷キャンパス接収にも抵抗した東大南原繁総長は、新渡戸稲造の教えを受けていた。その後の東大総長の矢内原忠雄氏は「日本の国立大学には、2つの大きな中心があつて、1つは東京大学、他の1つは札幌農学校でありました。この2つの学校が日本の教育における国家主義と民主主義という二大思想の源流をつくったのであります」と述べている。

しかし、この民主主義の流れは、昭和19年「軍事教練を課していない遠友夜学校、それは存在に値する学校ではない」として閉鎖命令を受けて、その歴史を終えたのだ。

私の恩師であつた北大の今は亡き松井愈教授は、実は、北大の学生であつた昭和17年と18年に、この遠友夜学校で最後に教壇に立っていた。氏は生前そのことについて私に語ることはなかった。しかし、先輩の言によると、憲兵隊に拳銃を突きつけられ詰問されたという。

この遠友夜学校における慈愛による教育と学びの精神こそ、人間が自由になるために何が必要なのかを実践した確かな足跡である」(木村 2010)。

こうした経験からであろうか、戦後、松井は自らの遠友精神の当然の道行きとして平和運動に足を踏み入れることになる。そこで新たに、大山郁夫、吉野作造、矢内原忠雄、南原繁、島崎藤村、小山内薫らに影響を与えた新渡戸稲造の思想的流れに触れることになったと懐術している(松井 1981)。

「さっぽろ文庫 18『遠友夜学校』」の編者の一人

で、遠友夜学校の学生教師をつとめた須田政美に以下手記がある。

「昭和五、六年の不況下の悩み、七年の北大文武会事件の嵐に続いての思想取り締まり強化、夜学校社会を暗くして行く戦時色の広がりテンポは早かった。そして教師の学徒勤労動員、その中に出征まで含まれた。軍事教練も課していない学校、それは存在に値する学校ではむろんあり得ない。十七年秋から十八年春にかけて最後の夜学校公務を担当した遠友寮在泊教師は、学業どころではない心労を余儀なくされた。半沢校長、宮部、高倉理事ら、及び古くからの関係者にとっては、暗い、心痛む日々であつたことは言うまでもない」(須田 1981)。

この手記は松井の冊子「遠友夜学校に学んで五〇年」にも引用されている。

先に三上が引用した山本の文章の軍事教練に関する記述(山本 1995)はこの須田の文章とほぼ同じ言い回しであり、また、山本と同じ日に、遠友夜学校創立百年記念レセプションでの、平塚直秀東京教育大学名誉教授のスピーチの記録(平塚 1995)にも同様の文章が見られる。

「昭和十九年三月『軍事教練を課していない遠友夜学校、それは、存在に値する学校ではない』として、学校は軍によって閉鎖に追い込まれ、ついに閉校した」。

言い回しの類似性から後二者の文章は須田の文章の引用と思われる。あるいは須田を含めた三者が引用した共通の引用先(例えば道庁からの通達の一部のような)があるのかもしれないが発見することは出来なかった。

三上は「(遠友夜学校の廃校は)新渡戸の精神を貫くために軍事教練を課さなかった、それがため軍の怒りを買ひ閉鎖に追い込まれたという説明は単なる思い込みによるものか、現代風の意味づけを与えるべく付加した創作だと思われる」(三上 2003)とまで言うが、彼が引用した山本の言葉は遠友夜学校創設100周年記念の記念講演を『思い出の遠友夜学校』という一冊の本に収録したものである。則ち、当時存命であつた多くの遠友夜学校卒業生や元教師の前で行つた講演であり、そこで事実を反することを言える状況ではなかったことを考慮すべきで

ある。さらに、この本の編集者や編集協力者も遠友夜学校関係者やその子供であり、事実に反すれば訂正を要求出来たはずである。また、山本は元北大理学部講師であり、遠友夜学校の最後をみとった、新渡戸の熱烈な信奉者で、遠友夜学校の学生教師をつとめていた松井愈もまた元北大理学部教授で、両者には濃厚な接点があり、直接聞き取りが可能であったという事実も踏まえるべきである。

三上は「教練を課さずに経営を維持していた学校は全国にいくらでもある」として、遠友夜学校がことさら特殊でないことを指摘しているが、そうした学校で、皇民思想が喧伝されていた戦時に、自由平等博愛と民主主義を説いた「リンカーンに学べ」と、敵国大統領に学べという校是を持った学校は他にはない。戦時にこのような校是を持った学校が軍に睨まれない方が不思議と言えまいか。「新渡戸の精神と軍事教練とを絡めて考えた」のはむしろ軍の方かもしれない。最後まで倫古竜(リンコルン=リンカーン)会を継続し、また、「日本の国を危うくするものは軍閥であると言わざるを得ない」と発言して³⁾ 国賊と呼ばれた新渡戸稲造を最近まで校長と仰ぎ、新渡戸会を開催して設立当初の精神を継承していた遠友夜学校は軍部にとって危険思想を持った学校と写らないはずがない。このような学校に対し、廃校をも視野に入れて軍事教練をせまるということはある得ないことではない。そして、事実、昭和17年にはその要求をしたのである(松井1991)。

昭和14年、新渡戸萬里子校長の死去にともない半沢洵が校長に就任した。その時の就任挨拶は、同年の青年学校義務化および、その頃急増した夜間中学の存在のため遠友夜学校への入学希望者の減少を踏まえて、遠友夜学校の将来を如何に展望すれば良いかを教師たちに考えさせる内容であった。

「此処に於て夜学校はその目的を変へて社会事業として、他の時代の要求する事業に転ずるか又は教育の対象を、例へば女子教育、成人教育、庶民教育等未だ教育機関の行亘らざる方向に転ずるの途をとるか、或は又全く組織を換へて教育機関としての体系を整へて、例へば青年学校となるか、然らざれば、現状の僅で規模を小さくするか、その何れか一を選ばなければならぬのであります。

然し何ら、所謂資格を有する学校に改組する事は恐らく社会事業としての性質を失ひ、現在の組織では不可なるのみならずその特徴をも失ふ事にもなるのでありまして、所詮採るべき途は次の二つであらうと思ひます。

即ち、その一は教育の対象を替へる事であり、他は専任者を設置して他の社会事業を経営せしめ、夜学校は塾式の昔に帰るとも従来の通り、経営し続ける事であります。

然し斯かる変化は熟考を要し、今日、二三の案は持つて居りますが、未だ実現の自信を持つに至りません。故に夜学校は従来通りの目的と組織によって遂行し、その変改は今後の宿題として諸氏の共に熟考下さらん事を希望致します。

然し乍ら斯る状態になっても夜学校の必要は失はれるものではなく、たとへ青年学校の義務化が行はれようとも当分の内は夫れに漏れるもの、あるべきことは恰かも小学校が普及しても初等部の生徒の急激な減少を見なかった例の如く、若し経済的原因により青年学校に入学し得ぬものがあれば之を収容することとし、その卒業生は青年学校卒業と同様の資格ある如くする様努めると共に、他方に於ては女子青年、晩学者、朝鮮人、其の他青年学校入学義務者以外の者で教育を要するもののあるべき故、それらの教育に当り完備され、法規によって教育方法の一定されたる教育機関とは種々の異なる特徴あるを以て、例へば、教材選択の自由、教育方法の自由、個人個人に立ち入った全的教育、自治的訓練等が挙げられます。これらを活かすことにより、学校本来の目的に向つて進み得ると考へるのであります」(半沢1981)

三上はこの半沢の校長就任挨拶を引用し、「その卒業生は青年学校卒業と同様の資格ある如くする様努めると言う言葉を「教練を課すことで青年学校認定を受けようとしていた」と解釈している(三上2003)。しかし、ここは、「青年学校卒業と同等の教育レベルを達成させるように努める」と解釈した方が、その前後の文章との整合性も良い。すなわち、前の段落で「所謂資格を有する学校に改組する

事は恐らく社会事業としての性質を失ひ、現在の組織では不可なるのみならずその特徴をも失ふ事にもなる」として青年学校への移行の可能性を否定しており、また後段では「教材選択の自由、教育方法の自由、個人個人に立ち入った全的教育、自治的訓練等が挙げられます。これらを活かすことにより、学校本来の目的に向って進み得ると考へるのであります。」と述べている。これらの教育の特色は青年学校ではとり得ない、正反対の教育方針であったからである。資格を有する学校への移行を否定しながら、「青年学校認定を受けようとした」というのは自己矛盾である。そもそも、半沢は軍事教練を課すとは一言も述べていない。当時の状況下で、生き残りのためには青年学校となることも選択肢の一つとしてあげられるが、それは自由を重んじる彼らの伝統的な校風から考えても取り得ない選択肢であった。

三上は指摘する。「公開を前提としない内々の日誌につづった「現実」とは具体的にどのようなものだったのであろうか。当時の教師たちは何を思いながら教育に取り組み、また閉鎖を決断したのであろうか。そうしたことを考えることなしに、遠友夜学校の最期について正しく把握することは難しい」(三上 2003)。まさにその通りであるが、このフレーズをここで言うということは、それを三上はしたが山本がしていないということを主張したいのであろうか。山本は札幌遠友夜学校創立百周年記念事業会編『札幌遠友夜学校資料集』(1995)の実質的編集者である。十分に考慮の上の結論であると考えられる。

また、歴史的背景を考えることなしに、綴られた日誌の額面のみを見て彼らの思いを判断することは出来ない。私信さえ検閲を受けた時代である。特に当時の学生教師松井愈宛のはがき(北海道立図書館蔵)には「内容確認済み」「検閲済み」のスタンプが押されているものがある。北大では1941(昭和16)年12月8日、真珠湾攻撃のその日、米国人教師ハロルド・レーン夫妻と、彼と特に親しかった北大生宮澤弘幸が特高に逮捕されている。宮澤が旅行中に立ち寄った根室の飛行場のことを夫妻に話したことが軍機保護法に触れるというのだ(上田 2013)。会話の内容さえ監視されているような時代

であったのである。非公開の日誌として、身の安全を考えれば、思いをあからさまに表現することは出来なかった。「夜学校五十年の流れを、ここに喰ひ止めた物は何か」という文章に、そのギリギリの表現の中に込められた、軍国主義に対する隠された深い怒りを読み取ることが出来ると思えるのは私だけだろうか。

三上は庶務日誌を引用しながら次のように述べている。

「誤解のないように再度確認しておくが、遠友夜学校が専検指定または青年学校認定のいずれをも選択しなかったことをして、『時流に抗した』とか『新渡戸精神』とかいった美談に帰結させることは妥当ではない。既にみたように、半沢校長は青年学校認定を目標としていたのであるし、一九四二年一月には一般の学校と同様に、生徒の諸会を統合した『札幌遠友夜学校報国会』と非常時の学校防護にあたる『札幌遠友夜学校報国隊』を結成している。報国会・報国隊の結成を決定した一月二十三日の庶務日誌には、『教師生徒の心を一新し新たなる教育の指導原理に従ひ教師生徒一体となりその才能を磨き身体を鍛錬し情操を豊かならしめ以て国家の中堅人物の養成に努めんため』と雄々しい決意が吐露されている。知識階級であるがゆえ、戦線が無制限に拡大することに危機感を懐き、国際協調を希求する者は当然多数いたであろうが、国策に抗っていたというような痕跡は見出せない。こうしたことから了知されるように、関係者は健全な愛国心・愛校心を持ち、総力戦体制下の国策に協力しながら学校を維持発展させる方法を考え続けていたという歴史的評価を与える方が自然である」(三上 2003)。

ここでも三上は半沢校長が「青年学校認定を目標としていた」と彼の解釈をあたかも事実のごとく述べている。更に、ここで遠友夜学校関係者が報国会・報国隊なるものを自発的に決定したように書かれているが、学生組織を維持しようとするならば、そのような形にしなければならなかった当時の事情の説明が無い。因に北大に於ける教官・学生の親睦と課外活動組織「文武会」も学徒報国会という形にさせ

られている。更に、三上は「国策に抗っていたというような痕跡は見出せない。」とするが、庶務日誌と言う公式記録にそのような痕跡が見出せようものなら、彼らが必死で守ろうとした学校はたちどころに潰されてしまったであろう。また、三上は、「雄々しい決意が吐露されている」として彼らが体制に迎合しているかのように考えているようであるが、その中身は解釈でいかようにもなる当り障りの無いものである。しかも、時代は体制に迎合しなければ、身の安全も保証されなかったような時代であった。彼らは「知的階級であるが故に」国策に抗う信条は持ちながらも、それをひたすら隠す術をも心得ていたのであろう。自由に対し当局の統制が厳しくなってきた昭和初期の恵迪寮生たちが、頻りに自治と自由を寮歌に歌い込み、それが規制されるようになると、「歴史」、「伝統」という言葉（恵迪寮は新渡戸稲造の思想などに刺激され明治32年より自治を獲得、寮生の間では自治と自由が寮の伝統とされていた）や、自由と自治の発露であった「記念祭（寮祭）」の感激を歌い込むことによってそれを表現し、仲間内でしかわからない、ささやかな抵抗をしていた時代である。自由にももの言える時代ではなかったことを考慮する必要がある。繰り返しになるが、当時の北大生が置かれていた歴史的背景を考えることなしに、そして、その時代の彼らの心情を知ることなしに、綴られた日誌の額面のみを見て彼らの思いを判断することは出来ないのである。

当時の北大生の心情を知ることができる元北大農学部教授安井勉博士の回想がある：

「昭和十八年入寮の筆者たちの時代、恵迪寮には委員会はなく、幹事会が代わりに存在していた。この時代、寮には制度としての自治はなかったのである。当時の記録（各部日誌、恵迪寮小史など）を読むと、その時代の寮生たちが消えかかる自治の灯を、心から心へと伝承してゆく苦勞を偲ぶことができる。

『みよ東海の空開けて』と、景気の良い軍国主義教育を受けてきた新丸にとっては、自由とか自治とかいう言葉が平気で交わされる恵迪寮での生活は、それだけで十分、過去の旧制中学時代の教育からの訣別を筆者らに迫るものであった。「寮規としての自治は失われても、

我々から自治と自由の精神を奪うことはできない」と嘯いて軒昂として過ごした日々が懐かしく思い出される。日常的なストームの禁止やみだりな寮歌高昌の自粛が求められ、上意下達機関としての指導部（修練部）の設置が押し付けられた幹事会ではあったが、その中でも寮歌は歌い続けられ、毎年の寮歌は生み出されて、自治活動の営みは、若者の胸の鼓動が続く限り拍動し続けていた」（安井 1986）。

三上は遠友夜学校「関係者は健全な愛国心・愛校心を持ち総力戦体制下の国策に協力しながら」として、国策に協力する愛国心を健全としているが、新渡戸（1925）の主張するように、国に盲従するのではなく、国に過ちがあれば、それを正す愛国心こそが真に「健全な愛国心」であろう。また、新渡戸を信奉していた当時の学生達にとっては、新渡戸がクエーカーであり、平和主義者であることは当然知っていたことであろう。1933(昭和8)年、新渡戸が死の直前に行ったカナダ・バンフでの演説の最後の言葉も平和の主張であった⁴⁾。「夜学校の精神は、50年の長きに亘って、些かも変形されずに今日に至っている」と言う言葉の中に、この夜学校が初期から継承して来た、札幌農学校の自由、自主、独立、弱者に対する利他の精神と、新渡戸の平和主義、そして彼が敬愛するリンカーンの自由平等博愛の精神と民主主義の思想が50年間脈々と受け継がれて来た、そしてそれを必死で守って来たことを窺い知ることが出来る。それを曲げてまで体制におもねて青年学校のような国権のプロパガンダの担い手になるよりは廃校を選んだのであろう。勿論、三上が指摘するように、状況は夜学校教育を継続するには物理的にも極めて困難な状況であった。

札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』234 ページに「廃校に立ち会った一人として」という松井の文章が掲載されている。

「昭和19年3月6日、新渡戸先生の筆太の横額“学問より実行”がかかげてある講堂で行われたこの年の卒業式は、同時に遠友そのものの閉校式でありながら、あまりにもささやかな寂しいものだった。大戦下に、追いつめられ破壊された生徒たちの生活という面からも、学徒出陣に続く勤労働員に次々と狩り立てられる

教師、北大生の条件からも遠友はかなり以前から瀕死の状況に追い込まれていた。新渡戸先生の教えと人間性に育まれ、それをひたむきに守ろうとした遠友が、その存在そのものを抹消し去ろうとする時流との相克の中で、ついに、この夜、姿を消したのであった。私は、私の傷つき破れた青春のピリオドとして今もあの日々を生々しく思い起こす」(松井 1981)。

「新渡戸先生の教えと人間性に育まれ、それをひたむきに守ろうとした遠友」というフレーズは、前述の庶務日誌に書かれた「夜学校の精神は、50年の長きに亘って、些かも変形されずに今日に至っている」という言葉と併せて「その存在そのものを抹消し去ろうとする時流」に必死に抗い、新渡戸の精神を守ろうとした当時の青年達の純粋な思いを偲ばせる。「時流との相克」という表現まである手記を見てもなお、『時流に抗した』とか『新渡戸精神』といった美談に帰結させることは妥当ではない」(三上 2003)と言えるであろうか。

松井は続けて、

「そしてその思いは昭和二十年の敗戦に前後して死亡した多くの遠友の友人たちへの思いと、遠友で育まれた思想と生き方の確かさをあらためて確認するという深い感動の中で迎えた敗戦の思いに硬く結び合っている。(中略)私自身が抱き続けている遠友、内なる遠友はむしろ当然の道行きとして、敗戦後私を(中略)などにはじまる平和の運動の道を歩ませた。」(松井 1981)

と記している。敗戦を「深い感動の中で迎えた」という表現は一読して奇異に響くが、遠友夜学校の最後の日々を精一杯時流に抗って生きようとした自らの生き様を振り返って、やはり自分は間違っていないという感動であったのであろう。後段の文章から、彼の言う「遠友で育まれた思想と生き方の確かさ」とは、新渡戸の平和主義の思想と遠友夜学校が校是としたリンカーンの自由平等博愛と民主主義の思想のことであることが推察できる。こうした思想は、日本国民には、戦後、初めてもたらされ、国民が享受することができるようになったのである。

結論

昭和 17 年に軍事教練を実施せよとの要求があったと言う松井の記録、その要求にもかかわらず、最後までそれを実施していないという事実、そして、庶務日誌や、遠友夜学校教師であった松井や須田の手記をみても、「総力戦体制下の国策に協力しながら学校を維持発展させる方法を考え続けていた」「国策に協力するために廃校とした」(三上 2001)といった、体制協力型の自発性があったとは到底考えられない。自由を重んじる校風や、遠友夜学校には当時の北大生の中でも、リベラルな精神の持ち主が多く関わっていたという事実からも、彼らがそれほど素直に、すすんで国策に協力したと言える脈絡は見えてこない。むしろ、昭和 17 年に、軍事教練を課すようにとの要求は確かにあったが、それに従わなかったために軍から睨まれた可能性が強く浮かび上がって来る。三上の、「新渡戸の精神を貫くために軍事教練を課さなかった、それがため軍の怒りを買って閉鎖に追い込まれた」という説明は単なる思い込みによるものか、現代風の意味づけを与えるべく付加した創作だと思われる」とする結論は再考を要すると思われる。一方で、「謬見である」と三上が批判した、当時を証言出来る人々が多かった時代に編纂された書物の記述にはそれなりの根拠があったと考えられた。三上論文は北大の正史に記載された論文であるので、このような反論のあることもここに明記しておきたい。

勿論、本論文は、三上が指摘するように、昭和 19 年 4 月より始まることとなった北大学生に対する 4 ヶ月の勤労動員施行で物理的に遠友夜学校の経営が限りなく継続不可能に近い状況に陥った事実を否定するものではない。

参考文献

- 『思い出の遠友夜学校』(1995)、札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編、北海道新聞社
『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』(1981)、札幌市教育委員会編、北海道新聞社
上田誠吉 (2013)、『ある北大生の受難—国家秘密

法の爪痕』, 花伝社

内村鑑三 (1926), 「私の見たる札幌 クラーク博士の精神今何処」, 大正 15 年 5 月 14 日付『小樽新聞』第 8 面

蝦名賢造 (1980), 『札幌農学校, クラークとその弟子達』, 図書出版

木村学 (2010), <http://d.hatena.ne.jp/kimura-gaku/20100729/1280446251>

高倉新一郎 (1981), 「有島武郎と札幌遠友夜学校」, 札幌市教育委員会編, 『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』, 217-220

穴戸昌夫 (1987), 「恵迪寮の三年を憶う」, 恵迪寮史編纂委員会編, 北海道大学恵迪寮発行, 『恵迪寮史 第二巻』, 1459-1467

須田政美 (1981), 「遠友夜学校の歩み」, 札幌市教育委員会編, 『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』, 32-85

新渡戸稲造 (1926), 「真の愛国心」, 『実業之日本』, 28 巻 2 号, 1925 年 1 月

半沢洵 (1981), 「校長就任にあたりて」, 札幌市教育委員会編, 『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』, 282-286

平塚直秀 (1995), 「真の愛国者・新渡戸稲造先生との関わり」, 札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編, 北海道新聞社, 『思い出の遠友夜学校』, 190-192

藤田正一 (2013), 「戦後日本における札幌農学校教育精神の開花—旧教育基本法」, 藤田正一著『日本のオールターナティブ—クラーク博士が種を蒔き北大の前身・札幌農学校で育まれた清き精神』, 238-244

松井愈 (1981), 「廃校に立ち会った一人として」, 札幌市教育委員会編, 『さっぽろ文庫 18 遠友夜学校』, 234-236

松井愈 (1991), 『遠友夜学校に学んで五十年 (稿本)』, 北海道立図書館所蔵 松井愈氏資料 資料番号 50

三上敦史 (2003), 「札幌遠友夜学校の終焉—北海道帝国大学関係者による社会事業と総力戦体制—」, 『北海道大学百二十五年史 論文・資料

編』, 202-240

安井勉 (1986), 「恵迪寮オンチと寮畜産部活動」 恵迪寮文集編集委員会編 恵迪寮同窓会発行『恵迪の青春〜エルムの樹蔭で』, 137-140

山本玉樹 (1995), 「遠友夜学校とリンカーン精神」 北海道新聞社編, 『思い出の遠友夜学校』, 153

Nitobe, Inazo (1893), “The Imperial Agricultural College of Sapporo, Japan” published by the Imperial Agricultural College of Sapporo, Japan 33 (新渡戸稲造全集第 23 巻にも収録)

注

- 1) 遠友夜学校「庶務日誌」三上論文が書かれた時点では札幌遠友夜学校記念室所蔵であったが、2014 年 7 月より北海道大学文書館所蔵
- 2) <https://www.library.pref.hokkaido.jp/web/hoppo/qulnh0000000008ag-att/qulnh000000000hew.pdf>
- 3) 松山事件：1932 年、新渡戸稲造が講演で松山市を訪れた際に、地元記者に対し、オフレコで、「近ごろ、毎朝、新聞を見て暗い気持ちになる。わが国を滅ぼすものは、共産党と軍閥である。そのどちらが怖いかと問われたら、今では軍閥と答えねばならない」と発言をした。オフレコであったにもかかわらず、これをとらえて海南新聞は、国賊であると言わんばかりに「新渡戸批判」を展開、新渡戸は生命を狙われる程のバッシングを受けた。
- 4) “Is it too much to hope then that in the intimate contact of nationals from all over the Earth, the day will gradually come when not passion but reason, when not self-interest but justice will become the arbiter of races and nations?” (「世界中の人々の親しき交わりによって、やがては感情ではなく理性が、利己ではなく正義が、人類並びに国家の裁定の基準となる日が来るであろうことを、私がここに期待するのは、余りにも多くを望むものだろうか。」)